

新建築

SHINKENCHIKU:2009

11



ポーラ銀座ビル

設計 日建設計+安田アトリエ

施工 竹中工務店

所在地 東京都中央区

POLA GINZA BUILDING

architects: NIKKEN SEKKEI + YASUDA ATELIER



同じ敷地にあった旧ポーラ銀座ビルの建て替え。銀座中央通りに面するファサード、幅300mmのアルミ押し出し型材が垂直に伸びる。建物高さ66m。



夜景、夕方からダブルスキンの内部に内蔵された可動パネルが波打つように開閉し、銀座の街並みに変化を与える。LEDの照明で発色パターンや色を変えることが出来る。

新たなフラッグシップ

「ポーラ銀座ビル」は1960年竣工の旧ポーラ銀座ビルを建て替え、創業80周年を記念したフラッグシップとして計画された。国内外のスーパーブランドが集積し、その魅力を高めつつある銀座地区にあって、銀座中心部の賑わいを京橋側に繋ぐ銀座一丁目のランドマークとなる建物を目指した。周辺は、今後開発が多く見込まれる地域で、ポーラ銀座ビルはその先駆的存在となる。

3つの美

ポーラが掲げた新ビルのテーマである美容・美術・美食の「3つの美」を受け、人の肌を輝かせる根源的な存在の「水」と「光」を今回のキーコンセプトとした。さらに生命を感じさせるイメージとして、「時」の経過と共に刻々と変化していく建築を目指した。建築というスタティックな構築物で、「変化」や「動き」を表現するために、ダブルスキン内にポリカーボネートの可動パネルとあらゆる色彩の表現が可能なLED照明を組み込み、建物の表情を自在に変化させることとした。「銀座ルール」*を適用することで高さ66mを得たこのダブルスキンは、銀座通りに向けての演出装置であると同時に、そのドラフト

効果を利用し、南面する建物の熱負荷を軽減する環境装置としても機能している。

1階は「ポーラ ザ ビューティ」のフラッグシップショップで、地下1階のエステと共に施主のリクエストによるJean-Philippe Nuel氏の内装デザインによるもので、新しいポーラのブランドイメージを発信している。3階には、入場無料で展開されるポーラミュージアム アネックスが設けられるほか、厳選されたレストランとショップが入居し、文字通り美容・美術・美食を具現化する建物となっている。

ポーラ創業80年の伝統を重んじながら新しい歴史を刻む器として、白磁のごとく高い気品と凛とした姿勢で街並みに参加することを期待している。

(中屋敷公一／日建設計)

* 中央区の銀座地区の景観を守るため、1998年に容積率や建物高さ制限、壁面後退等について規制を設けた地区計画。その後、都市再生特別措置法が制定され、銀座地区にも大規模開発プロジェクトが頻出したことから、2006年に「銀座ルール」から建物の高さ制限等の例外規定をなくす、前面道路の幅員などによって高さが決められており、2009年10月現在、規制範囲の建物は最高高56m、屋上工作物10m（合計66m）、ポーラ銀座ビルはこれにしたがった高さである。



配置 縮尺 1/3,500

設計 日建設計+安田アトリエ

施工 竹中工務店

敷地面積 410.05m²

建築面積 354.97m²

延床面積 4,497.60m²

階数 地下2階 地上12階 塔屋2階

構造 鉄骨造 一部鉄骨鉄筋コンクリート造

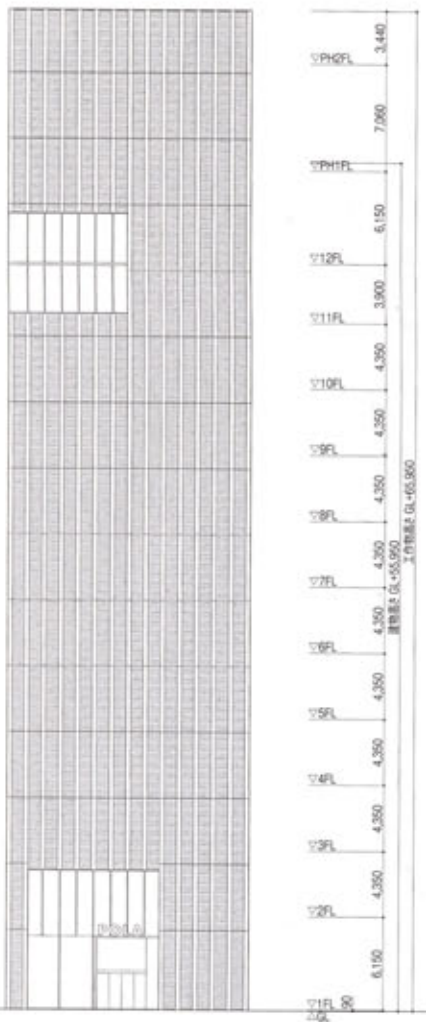
工期 2008年6月～2009年9月

撮影 本誌写真部 高橋葉生 *山内紀人(特記を除く)

(データシート192頁)



南西側から京橋方向を見る。くり貫かれた11階と12階にレストランが入る。*



南立面 縮尺 1/500



上階部分とレストラン階の開口部、南側に開いた開口部からは、銀座通り沿いに広がる街並みを望むことができる。

動くファサード

銀座中央通りとのインタラクション

垂直線を強調した光の塔

銀座という都市の将来像を見据えると近い将来軒高が揃うことは明らかだ。そこで新ビルの顔となる中央通りに面する立面を最重視し、銀座の街へ積極的に参加することを意図した。

ファサードについては、垂直線を強調したストライプのイメージを設計スタート当初から持っていた。それは光の帯が空へまっすぐに伸びていくような力強いものである。外部側に300mm幅広のアルミ押出型材を用いたサッシと透明ガラスのシンプルなダブルスキンとなった。ガラスの後ろに合計180枚の半透過のキネティック・パネルを吊り下げ、地上から空までファサード全体を埋め尽くした。

細胞をイメージさせるパターン

パネルは12mm厚・4m長のポリカーボネート製で、細胞をイメージさせるような大きさや濃淡の異なるパターンを両面印刷した後、工場でハット型に折り曲げ加工を施し制作された。パネルの回転駆動はオートヒンジとモーター連動のピンチローラーの組み合わせによる単純な可動機構を新規開発した。静止している状態でもパネルは浮遊感があり、今にも動きそうな気配が漂っている。

昼間時、半透過のパネルは東南からの強い光を柔らかく遮光する日除けスクリーンとして有効に働き、通常はベニシアンブラインド等で遮光すると視覚的にも街と遮断されてしまうのだが、室内からも銀座という街を身近に感じることができる。ダブルスキンとパネルの組み合わせによって、人の肌と同じように内部環境を守り省エネ効果も得られた。

生きているファサード

一方、夜間にはLED照明がパネルを照射しファサード全体をホワイトブルーに発光させることによって柔らかい表情を都市に提供する。さらに時報の役割として、パネルのメカニカルな動きと光の動きによってファサードがまるで生きているようにその表情を変化させ、銀座に新たな光の塔を創出することを意図した。動くことによって、呼吸し細胞が活発に動いている健康な人の肌を想起させ、生き生きとしたメッセージを街に発信するファサードを目指した。

(安田幸一)



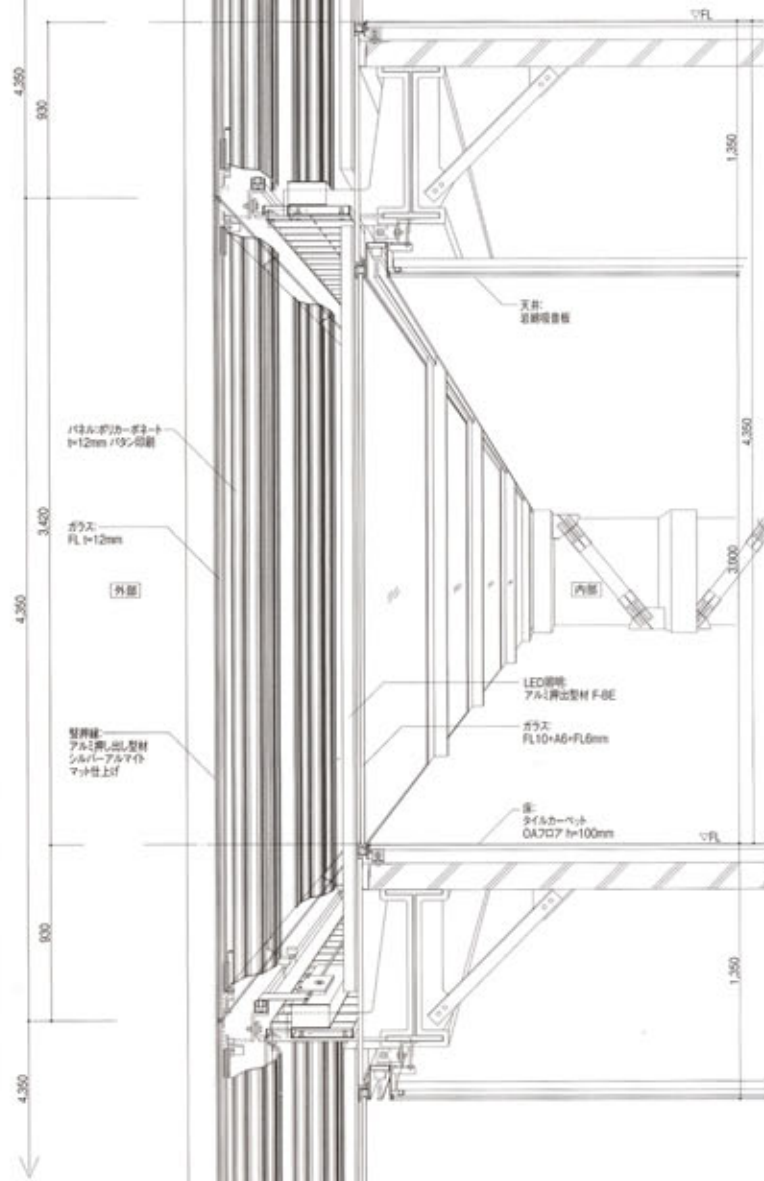
ダブルスキンに内蔵されたポリカーボネート製の可動パネル。表面には細胞を彷彿とさせるパターンが施されている。



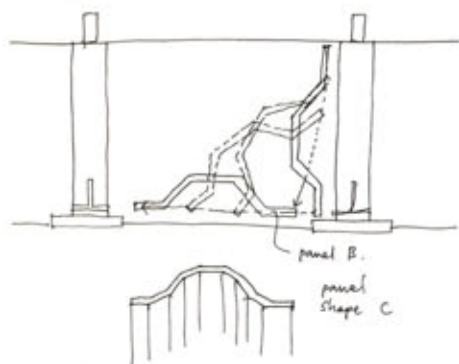
上：通常パネルは閉じている。
下：イベント時以外は各階でパネルの開閉を制御できる。



ファサードを見上げる。ダブルスキンのマリオン内部に内蔵されたLED照明がパネルを照らす。

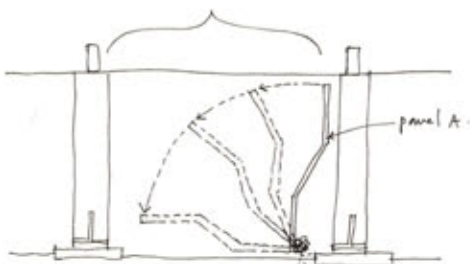


断面バース 縮尺1/40



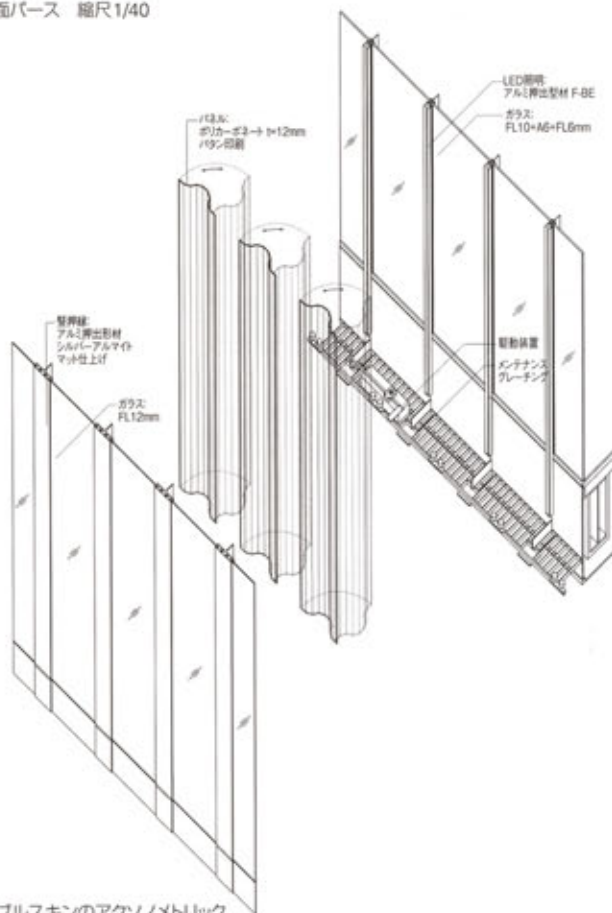
2008.03.25
scheme 3

wide view from interior



people from 4. chome
pin
worn

3rs
3rs?
panel can be seen from exterior



ダブルスキンのアクソノメトリック

パネル開閉方法のスタディ。安田幸一氏とチャック・ホバーマン氏の協働スケッチ。画像提供: 安田幸一

